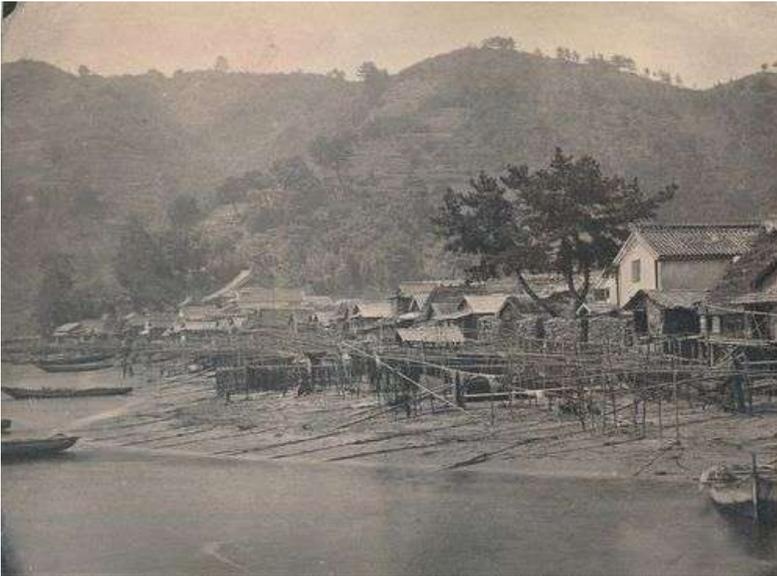
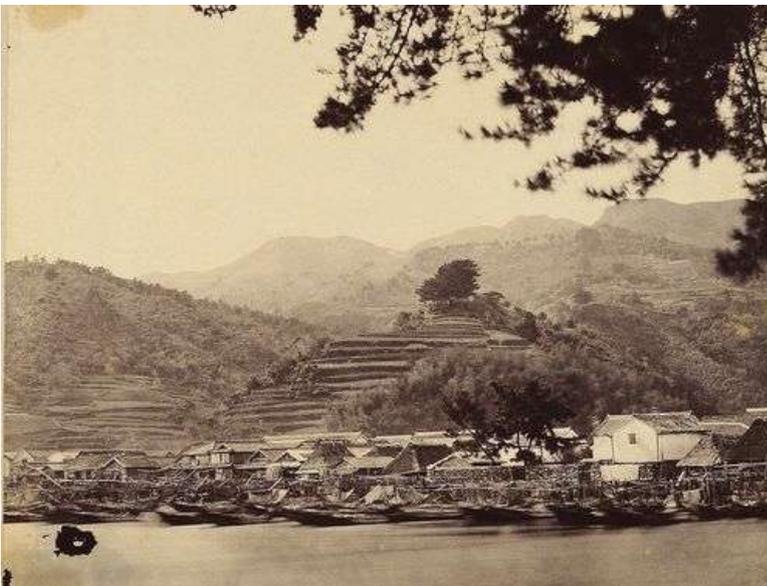


## 28 海岸(1)



撮影者：マンスフェルト  
明治初期  
画像提供：長崎大学附属図書館

写真中央は城山。中央の左寄りに玉台寺が見える。



撮影者：F. ベアト  
慶応元年 1865 年  
長崎大学附属図書館所蔵

沿岸の前面が砂地になっており、漁船が係留されている。その奥に護岸があり、各家は石塀で囲われている。藁葺きの家もあるが、漆喰仕上げの蔵がいくつかあり、また瓦葺きの家も見られる。



大正時代には、茂木・長崎間に鉄道敷設の計画があり、大正 10 (1921) 年に資本金 50 万円で茂木鉄道株式会社が設立され、大正 12 (1923) 年から弁天山の北側の堀切の工事と同時に茂木港内の埋立て並びに打越海岸の埋立てが行われた。結果的に、鉄道敷設には至らなかったが、堀切の掘削と海岸の埋立ては大正 15 (1926) 年に完了した。



現在の堀切

## 29 海岸 (2)



撮影者：宮本忠彦 昭和30年代

写真の左方向に弁天橋が架かっている。若菜橋はこの右手（上流側）に位置する。奥の一段と高い屋根は、十八銀行茂木支店の建物である。  
手前に干している網は、伊勢えび漁に使っていた磯立て網である。



## 30 棧橋



大正初期の絵葉書写真 長崎大学附属図書館所蔵



大正初期の絵葉書写真 長崎大学附属図書館所蔵



年代未詳 絵葉書写真 長崎大学附属図書館所蔵



年代未詳 絵葉書写真 長崎大学附属図書館所蔵

若菜川下流の淵頭海岸に棧橋がつくられていたが、水深が浅く乗降は端艇によらなければならなかったため、明治34(1901)年8月棧橋用突堤(長さ約82m、幅約3.6m、高さ平均約4.5m)が築造され、この突堤から浮き棧橋として、長さ約11m、高さ約0.9mの箱舟を造り、これを3隻並べてつないでいた。

この棧橋は、昭和8年8月に茂木港中央に新棧橋ができるまで使用され、昭和30年2月、砂防堤築造の際に突堤が取り壊されたため、現在は残っていない。

明治末期から大正年間にかけて、三角、島原、小浜行きの3航路があったが、昭和に入って天草三角航路のみとなった。



大正12(1923)年から現在までに、防波堤の建造や港の中の埋立などにより、茂木港の景観は大きく変わっている。

## 31 海岸(3)



撮影者：小川一真 年代未詳 長崎大学附属図書館所蔵

埋立て前の茂木港内は遠浅の砂浜で、潮見崎方面の海岸は岩場であった。



大正 12(1923)年からの埋立により砂浜がなくなった。写真には陰になって見えないが正面倉庫の立ち並ぶ突堤と対岸の間にある茂木港中央部に昭和 8 年から昭和 54 年まで使用された栈橋がある。

茂木港が面している橘湾は、長崎名勝絵図によると、「北に彼杵郡、南に薩州、東に天草、西に島原がそれぞれあり、四方に通じるので四岐洋（しきなだ）と名づける。…一に千巖洋（ちぢわなだ）名づけるのは、山からとった名である。」と記している。明治 33 年の図面には「千々石灘」と記されている。現在、正式（法の記載）には「橘湾」とされている。

これは、大正 8 年帝国海軍水路部が、旧千々石町出身で日露戦争に従軍し戦死した橘周太中佐の遺徳を偲んで「橘湾」と告示したことによる。

現在は「橘湾」でも「千々石湾」のどちらでも通用している。

なお、橘湾の範囲は、旧南高来郡飯盛町三味線島と南串山町国崎を結ぶ線以東の湾奥だが、漁業上は、旧野母崎町樺島と口之津町瀬詰崎を結ぶ線以北である。

## 32 枇杷集散場



昭和初期 枇杷集散場

この枇杷集散場は、大正 13(1924)年 5 月に完成したが、昭和 27 年 2 月 11 日朝の火災により消失した。



年代不詳



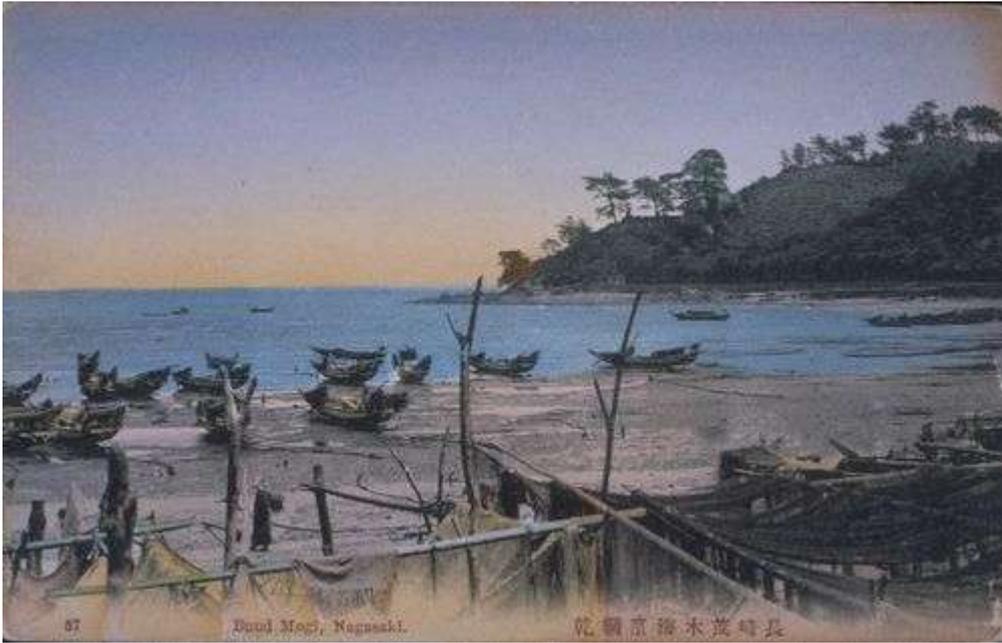
昭和 43 年に完成した枇杷集散場

明治期の主な農産物であった野菜類の販売は産地仲買商によるものも多く、生産者が販売に困ることもなかった。枇杷も生産者が採取して長崎市中に販売する者もあったが、産地仲買商に立木のまま販売することが一般的だった。

立木での販売は、枇杷の生産が増えてくるにしたがって弊害が多くなってきたため、大正初期には生産者が加わって長崎果菜株式会社を設立したが、会社の利潤追求で生産者が苦しんだため間もなく解散した。大正 5(1916)年に長崎の果物問屋・仲買商で作った〇ナ組合も生産者の要求を満たさなかったため、大正 6(1917)年茂木枇杷共同販売組合を結成し、組合の仲介で問屋との取引を行うようになった。大正 11(1922)年に同業組合準則による共同販売を目的とする茂木枇杷組合に改組した。

大正 13(1924)年に 150 坪の枇杷集散場を建て、組合と指定問屋の取引が行われたが、出荷期の途中で価格が突然暴落した。問屋側は消費市場の暴落が原因としたが、組合は納得しなかった。調整がつかないまま出荷した枇杷が放置されたため、組合が組合長などを主要消費市場へ派遣して調査した。その結果、この暴落は、長崎市の問屋・仲買人の談合による工作だと判明し、枇杷組合が各消費市場へ直接出荷をはじめることとなった。

### 33 海岸(4)



年代未詳 長崎大学附属図書館所蔵

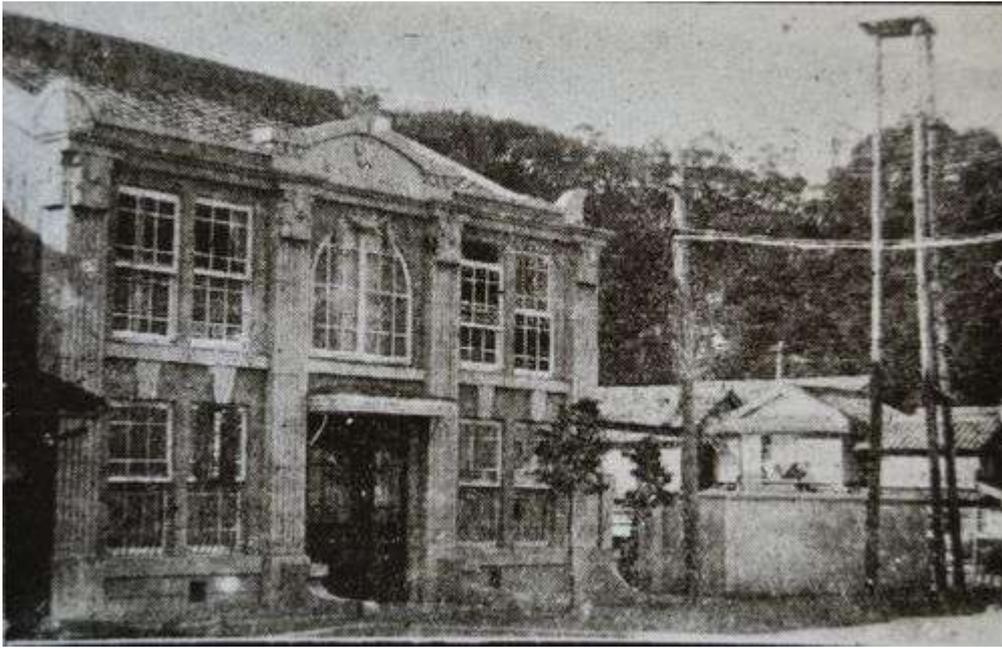
漁村の浜の散在する漁船と網乾の様子が撮影されている絵葉書写真。茂木は外国人の保養地として人気があったが、明治18(1885)年には旧県道が開通し、明治39(1906)年には茂木ホテルが開業し、観光客に絵葉書が販売されていた。

大正12(1923)年に始まった埋立て工事前の茂木の海岸の様子がよくわかる写真である。



砂浜の海岸は、埋立てと浚渫で漁港となっている。正面には潮見崎観音堂がある。上の写真では、数本の松の木がある。当時、茂木には松の木が多かったということであるが、現在は残っていない。古写真の砂浜は埋め立てられ、建物が建っている。

## 34 茂木郵便局



年代不詳 茂木郵便局

橋口の若菜橋の側にあった頃の郵便局の建物である。

右の方に見える民家は、間に若菜川を挟んだ、片町になる。大正 11(1922)年に架け替え前の若菜橋は郵便局の裏から渡っていたが、架け替え時に、郵便局の前に移された。

1874 年	明治 7 年 12 月 16 日	旧庄屋に茂木郵便取扱所を設置した。 明治 21 (1888) 年までは村長が郵便局長を兼務していた。
1886 年	明治 19 年 5 月 25 日	茂木郵便局と改称。
1888 年	明治 21 年 1 月 26 日	独立局舎をつくる。
1903 年	明治 36 年 8 月 8 日	644 番戸に木造瓦葺局舎を新築し、移転した。(敷地 48 坪)
1922 年	大正 11 年 1 月 21 日	局舎を木造瓦葺 2 階建に大改築並びに移動した (1580 番地、前局舎地。敷地 78 坪)。
1953 年	昭和 28 年 3 月 20 日	局舎をモルタル塗装で新装。
1972 年	昭和 47 年 11 月 20 日	局舎を新築。(前局舎地)
2003 年	平成 15 年 2 月 17 日	局舎移転新築 (現在地、旧庄屋跡)



郵便局があった場所は、現在駐車場になっている。

## 35 十八銀行茂木支店



年代不詳



年代不詳

橋口商店街にあった頃の十八銀行茂木支店の写真である。

1919年	大正8年11月1日	茂木で営業を開始。
1920年	大正9年12月18日	本郷1628番地に支店を創設。
1934年	昭和9年3月31日	支店を閉鎖。
1947年	昭和22年1月10日	営業を再開し、昭和25年6月に支店に昇格した。
1981年	昭和56年4月13日	現在の県道沿いに移転した。



跡地は、現在駐車場となっている。

## 36 茂木の町並み (2) 寺下



チャールズ・ワグマン



英国人のチャールズ・ワグマンが描いた水彩画で、右手前が現在のさつまや、左手前が当時の一口香の建物、正面に突きあたりが玉台寺になる。一口香は弘化元(1844)年えのき屋としてこの場所で創業した。

江戸時代末期で通りの人は、ちょんまげを結っている。当時の茂木の町の賑わいが現れている。

チャールズ・ワグマンは、イラスト入りでニュースを報じるイギリスの週間新聞の記者兼挿絵画家で、1861年に長崎を訪れている。その後、英国公使のオールコックの一行と共に陸路、横浜、江戸へ向かった。



左の写真は、寺下から移転して、橋口商店街にあった頃の一口香。昭和3年に現在の埋立地に移転している。現在は昼店となっている。

## 37 茂木の町並み (3) 玉台寺墓地



明治中期 長崎大学附属図書館所蔵



撮影者：小川一真 明治中期 長崎大学附属図書館所蔵



明治中期 長崎大学附属図書館所蔵

岬の先に明治 34(1901)年に築造される栈橋は、まだ出来ていない。3枚の写真は、岬の先端の変化で撮影の前後がわかる。

海岸には、多くの漁船と網干し場が見られる。

上段の右の写真は干潮時で、遠浅の砂浜であったことがわかる。

岬の中ほどには、後に外国人の保養所の茂木ホテルとなった旧庄屋の建物が見える。明治時代の茂木には、外国人の行楽、海水浴などのために、外国人のためのホテルが建てられた。長崎在泊軍艦乗組員が隊伍を組み、行軍したという。この写真から、江戸時代から続く、茂木の町並みを見ることができる。



古写真左側の通りが、橋口の商店街の通りで、下の写真の中央の通りになる。大正 12(1923)年からの埋め立て工事により砂浜が埋め立てられ、宅地化していることがわかる。

## 38 玉台寺山門



年代未詳 長崎大学附属図書館所蔵

浄土宗の松尾山無量院玉台寺の山門。玉台寺は、僧寶譽の創建で島原の領主松倉氏の代に第三世義山和尚が再建している。義山和尚は日見の桜谷寺、樺島の無量寺の開山もある。寺内には島原洪水の際に打ち上げられた死骸を埋めた塔がある。塔の傍には俗に「三官さんの墓」と言われる唐人の墓がある。

山門の階段下は砂浜で、大正12(1923)年からの埋立て前は、海岸だったことがわかる。また、当時、大潮の満潮時に新田方面に行くには、山門下は通れず、玉台寺の中を通過していたとのことである。



現在の山門前は、住宅街となっており埋立て前の面影は感じられない。山門の向かって右側は、昭和初期に旧茂木町内に祀られた、茂木四国八十八ヶ所の第7番霊場である。

## 39 茂木長崎ホテル



年代未詳 絵葉書写真 長崎大学附属図書館所蔵



年代未詳 絵葉書写真 長崎大学附属図書館所蔵

新田に外人専用のホテルとしてあったが、開業と廃業時期は不明である。大正 12(1923)年頃から昭和 12 年頃までは、「松柏楼」という小料理屋に変わっていた。

昭和 16 年頃、橋口の若菜橋の近くに移築したが、敷地が狭いため寄棟を切妻にし、長さを短縮するなどして長屋造りの民家として使用している。



長崎バスの駐車場の道路向い付近に位置していた。



橋口の若菜橋の近くに移築された民家。

## 40 新田から見た茂木の港



年代未詳 長崎大学附属図書館所蔵

茂木の海岸と茂木村本郷の家並み。



この写真を撮った位置は、古写真では海の中に位置する。同じアングルでは、建物が建っているため撮れない。

古写真の右手の山上に木が一本生えている山が、下の写真で、建物の右手に小さく見える山である。

古写真の左手の山の尾根部分に木が数本写っている下に玉台寺の墓地があり、玉台寺の銀杏の陰に本堂が見えている。下の写真では電柱の後方に落葉した銀杏の木が見える。

大正 12(1923)年から茂木鉄道株式会社による堀切工事と同時に、茂木港入口の防波堤の築造が進められた。茂木港入口の防波堤の築造は、茂木鉄道株式会社提供の堀切掘削の土砂による弁天橋から玉台寺付近に至る海岸埋立地約 1,700 坪を財源とし、昭和 2 年に竣工した。

港内の水深が浅く船の出入・碇泊に支障があるため、海底を浚渫し、その土砂で新田以南の埋立て工事を昭和 3 年から昭和 7 年にかけて行った。

昭和 8 年に港内中央部に新栈橋を築造した。その後、新栈橋からさらに埋立てが拡張され、現在のようになっている。また、この栈橋は、弁天山のそばの埋立地に茂木港フェリー埠頭が出来る昭和 54 年まで使用された。

## 41 潮見崎(1)



年代未詳 長崎市歴史文化博物館所蔵 絵葉書写真



写真右側の高台に潮見崎観音寺がある。左側に突き出ている半島は赤崎鼻である。澄んでいるときは正面に島原半島が見える。現在はここから宮摺町、大崎町、千々町を通って野母崎方面に道路が整備されているが、当時、荷物の運搬等は舟に依っていた。

下の写真の電柱の左側には、原爆慰霊碑が建立されている。これは、昭和20年8月9日に長崎に原爆が落とされたとき、救護を求めて負傷した多くの被爆者が茂木に来ている。このとき、負傷者を仮救護所の料亭「観月」と川南造船所の寮であった「望洋荘」に収容し、警防団、町内会、国防婦人会等を中心に救護にあたった。しかし、手当ての甲斐も無く多くの方が亡くなり、立石海岸で茶毘に付された。このときの犠牲者の慰霊のために平成12年に茂木地区振興協議会が建立したものである。

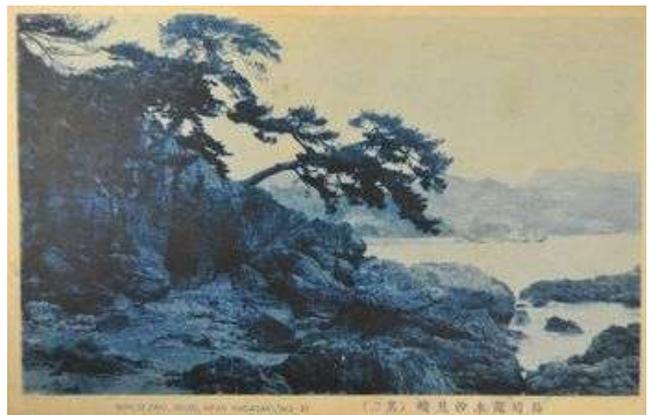
## 42 潮見崎(2)



年代未詳 長崎市歴史文化博物館所蔵 絵葉書写真



年代未詳 長崎市歴史文化博物館所蔵 絵葉書写真



年代未詳 長崎市歴史文化博物館所蔵 絵葉書写真



左に昇ったところに、潮見崎観音寺がある。  
正面の海の向こうに北浦が見える。  
下の写真の中央の高い山が甑岩である。

## 43 潮見崎観音寺



年代未詳 長崎市歴史文化博物館所蔵 絵葉書写真



松月庵と称し、宝永3(1706)年7月開山。十一面観世音菩薩を祀り子育て・子授けの観音として信仰されている。ここは、茂木四国八十八ヶ所の第52番札所となっている。

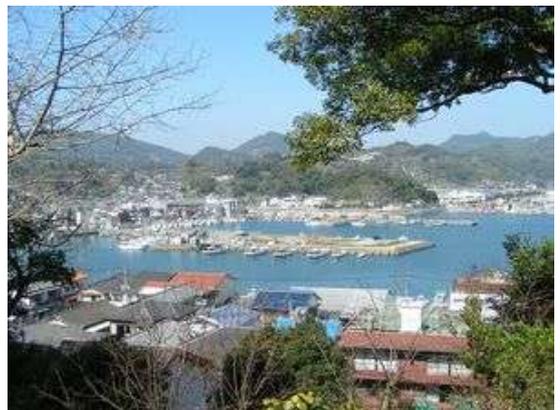
この観音堂までは144段の石段があり、その途中には、第23番・18番・83番の札所がある。

境内の大きな松の木はなくなっている。茂木の古写真には、松の木がよく写っているが、ここ同様、現在はほとんどなくなっている。

この観音堂の前は、橘湾に面しており、天気の良いときは、島原半島から天草の眺めが素晴らしい。



観音堂の前に広がる橘湾。前方左は島原半島。右は天草。



境内から見た茂木港

## 44 立岩



年代未詳 長崎大学附属図書館所蔵 絵葉書写真

茂木は外国人の保養地として人気があったが、明治 18(1885)年には旧県道が開通し、明治 39(1906)年にはビーチホテルの前身となった茂木ホテルが開業し、観光客相手の絵葉書が多く残されている。戦前の茂木には松の木が多くこの岩にも生えているが、現在ではほとんど見ることはない。



年代未詳 長崎大学附属図書館所蔵



年代未詳 長崎大学附属図書館所蔵 絵葉書写真



当時の松の木は枯れてしまい、中央の岩の上部に、一本の松が生えている。



年代未詳 長崎市歴史文化博物館所蔵 絵葉書写真

長崎名勝図絵によると「立石ともいう。しめが崎の後にあり、浜辺を離れて海中にある。高く聳え立っていて、頂上に松がある。昔は五葉松の巨木であったが、一度枯れて、その後に生え出たのは、普通の松である。この岩は大小二つ並んでいて、一つは大きく、数十丈はあろう。一つはやや小さいが、この方にも上の真中に樹木がある。盆石でも見るようで、大変珍しい。

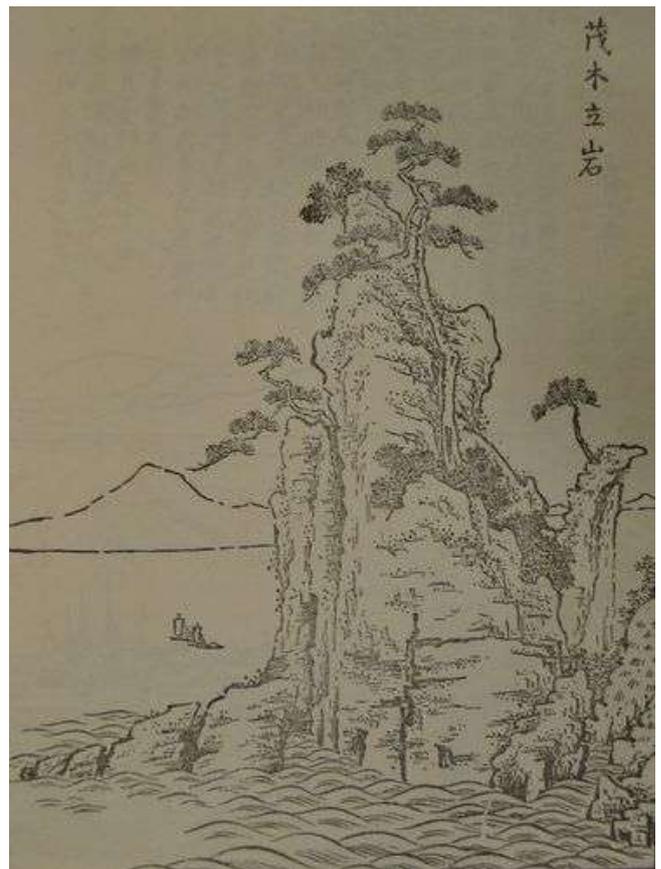
立石を見て

大田南畝

またたくひあら磯浪のたて岩を島このみする  
人にみせはや

」とある。

郷土史（1958年茂木町）には、「昭和8年海水浴場が開設し奇岩立岩海水浴場及び約4キロメートル隔て、宮摺海水浴場があり、どちらも水清く砂心地よく最適の海水浴場である。」と記載されている。



長崎名勝図絵

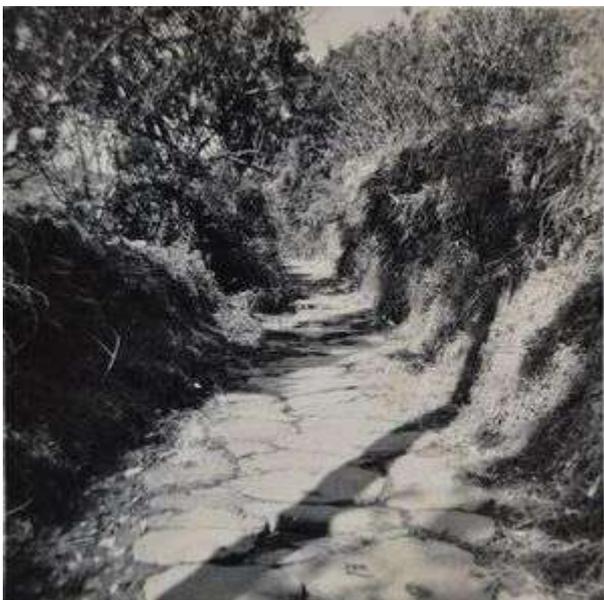
## 45 旧茂木街道(1)



撮影者：前田利雄 昭和30年代前半

明治18(1885)年に旧県道が整備されるまで長崎～茂木はこの道を通っていた。写真に見える石畳は、明和6(1769)年江波市左衛門が敷いた地元産の温石石の石畳である。

写真は片町の石の御前の入口付近で、写真上部に見える鳥居は、石の御前(大山祇神社)の鳥居である。長崎名勝絵図にも「鳥居は道の側に立つ。」とある。現在の鳥居は階段の上にある。



撮影者：前田利雄 昭和30年代前半  
上の写真を先に進んだ場所。



中央奥の電柱の右側に階段があり、鳥居は階段の上に設置されている。

## 46 旧茂木街道(2)



撮影者：前田利雄 昭和35年3月

明和6(1769)年江波市左衛門が地元産の温石石の石畳を敷いた茂木街道は、明治18(1885)年に旧県道が整備された後、従前のままだったが、昭和31年12月～36年11月にかけて道路の整備が行われた。このとき、道に敷いてあった温石石は、そのまま埋められたり、石垣に使用されたということである。上の写真は工事中の片町を登りきったところで、写っている人の後ろの石垣にも温石石は使われている。



撮影者：前田利雄 昭和36年



中段左の写真の碑は、この道の道路開通碑である。

左の写真は、上の写真と角度を変えたもので、点線で囲んだ部分の薄い石が石畳として使われていた温石石である。

## 47 旧茂木街道(3)



撮影者：前田利雄 昭和30年代前半

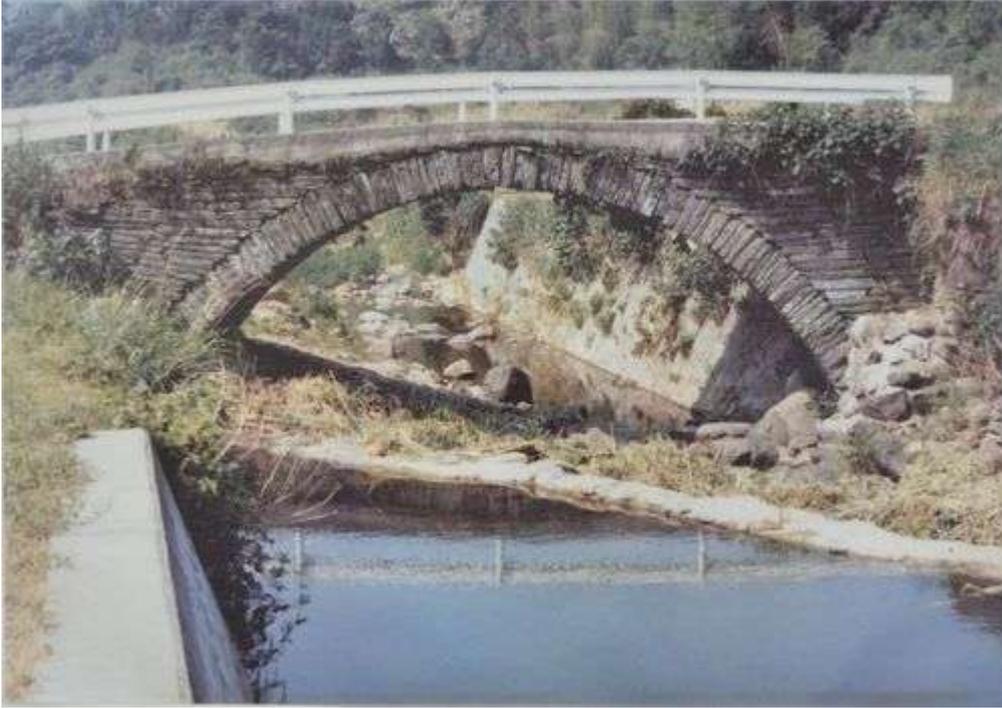


撮影者：前田利雄 昭和30年代前半



昭和31年12月～36年11月にかけて道路の整備が行われる前の茂木街道で、道には温石石の石畳が敷いてある。明治18(1885)年に旧県道が整備される前は、この道が唯一の街道として賑わっていた。

## 48 柳山橋



全長 11m、径間 9.6m の石橋

明治 18(1885)年に旧県道が出来るまでの茂木街道は、片町から裳着神社の手前で山手に向かい辻を通り、この柳山橋を渡って転石、田上から小島へ通じていた。

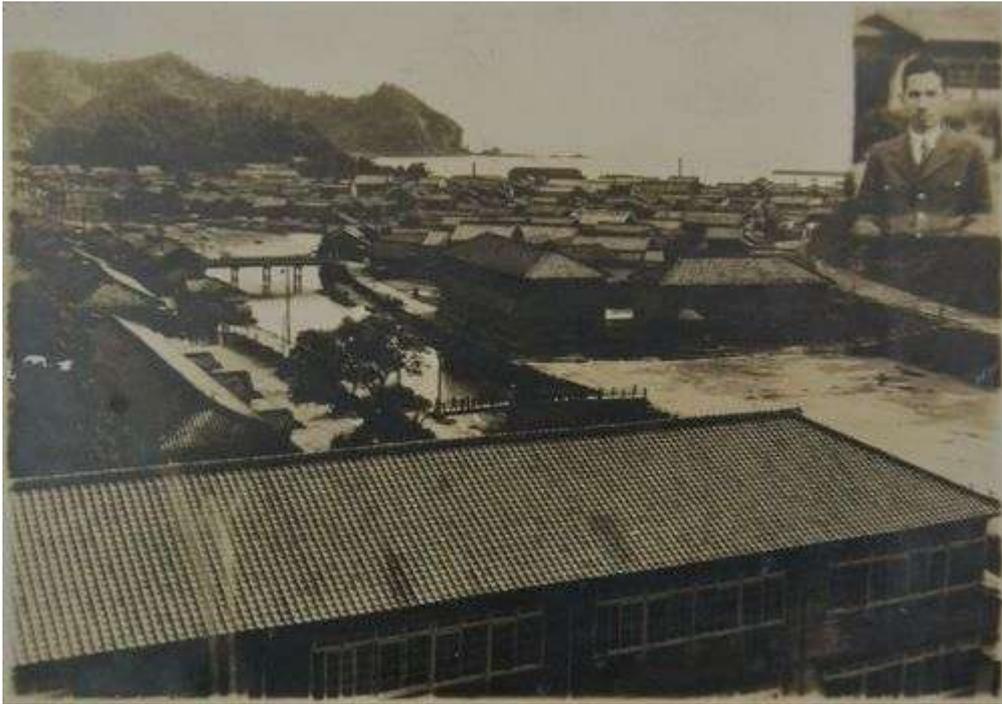
この茂木街道には、明和 6(1769)年に江波市左衛門が温石の石畳を敷きつめた。また、安政 5(1858)年には、長崎の魚商である、出来鍛冶屋町の竹内億介と東築町の蒲池喜兵衛が私費で、石橋を架けて通行の便をはかった。旧県道が出来るまではこの茂木街道が唯一の幹線であり、その頃の荷物の運搬はサジ（指）といって番所に登録して許可を受けた運搬夫が、肩に担いだり、牛馬で運搬していた。

この石橋は、現地産の緑片麻岩を使い、自然石に近い状態で築かれたアーチ橋で、昭和 47 年 6 月 10 日に市指定有形文化財となったが、昭和 57 年 7 月 23 日の長崎大水害の際に流出した。



現在の橋は、昭和 57 年 7 月に石橋が流失した後、昭和 58 年 10 月に架けられたものである。

## 49 茂木中学校



創設当時の校舎（現在の茂木小学校運動場の東側）



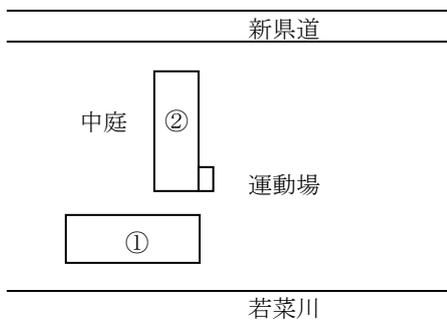
中庭

後方の校舎は右の①の建物。



昭和25年3月卒業生

建物は②の校舎、左後方は南川の民家が写っている。



上の写真の運動場に面した2棟が中学校校舎として使用された。

①の校舎は、昭和24年10月、中学校へ移転のため解体している。



現在の茂木小学校運動場



北浦新校舎の落成式



北浦新校舎の落成式の獅子踊



土俵（現：プールの場所）



- 昭和 22 年 4 月 1 日 茂木町立茂木中学校 創設（日吉・千藤の 2 分校を置く）
- 昭和 22 年 4 月 18 日 開校式、茂木小学校南校舎 2 棟の分譲を受け授業開始
- 昭和 23 年 10 月 31 日 北浦の現在地に北校舎 1 棟 219.75 坪竣工
- 昭和 37 年 1 月 1 日 長崎市編入により長崎市立茂木中学校となる

## 50 東高等学校茂木分校



東高等学校茂木分校入学記念 昭25.4.10

昭和24年6月に茂木町議会で分校設置が決議され、同年8月に県教育委員会より長崎東高等学校茂木分校として設置が認可された。普通課1学級の4年定時制（昼間）であった。同年9月20日に第1回入学式が行われ、新入学生は25名で、茂木小学校の仮教室でのスタートであった。

当時、茂木町のバスの便のほとんどが本ノ郷止まりで1日に2、3便が北浦、宮摺に通うだけで、日吉地区は、愛宕へ出て茂木行きに乗り換えなければならなかった。昼間定時制だったのは、夜の交通手段がなかったためである。このように、交通不便な立地のため、定員45人の生徒確保が困難なばかりでなく、2年進級時に生徒が減るのが常で、昭和28年3月の第1回の卒業生は14名であった。

昭和28年になって、茂木中学校の川向かい（後の長崎南商業高等学校第2グラウンド）に独立校舎が完成した。



昭和55年に移転した新校舎

昭和24年	9月20日	長崎県立東高等学校茂木分校開校（茂木小学校に仮教室）
昭和25年	3月22日	長崎県立東高等学校茂木分校、茂木中学校仮教室へ移転
昭和28年	4月18日	長崎県立東高等学校茂木分校、独立校舎完成移転
昭和44年	3月31日	県立長崎南高校茂木分校となる
昭和46年	4月	全日制商業科に切替え
昭和49年		全日制商業科2学級へ
昭和50年		全日制商業科3学級へ
昭和52年	4月	県立長崎南商業高等学校開校（長崎南高茂木分校から商業科の高校として独立）
昭和55年	5月	新校舎移転
平成20年	3月	県立長崎南商業高等学校閉校

## 51 早坂小学校



年代未詳 学芸会（小鹿のバンビ）の記念写真

右側の建物が教室、渡り廊下の上の正面の建物が職員室、職員室の奥に下の写真の茂木中学校早坂分校舎が建てられた。



昭和 27 年 3 月



昭和 22 年 新築時の茂木中学校早坂分校校舎



現在は、長崎女子短期大学の敷地となっている。

明治 15 年	1 月 木場名の松本傳次郎宅を借り、中等茂木小学校木場分校を設置（木場、田上、田手原の 3 名を通学区域とする）
明治 16 年	校舎を木場名地藏堂に移す 田上名氏神拝殿と田手原名若杉吉松宅にそれぞれ分舎を置く
明治 17 年	木場分校を渡邊徳次郎宅に移すと同時に田上と田手原の両分舎を廃止
明治 19 年	4 月 早坂簡易小学校と改称し、田手原名に分校を設置
明治 25 年	4 月 早坂尋常小学校と改称
明治 29 年	9 月 新築校舎落成、田手原分校を廃止
昭和 13 年	5 月 早坂尋常高等小学校と改称
昭和 16 年	4 月 早坂国民学校と改称
昭和 22 年	4 月 早坂小学校と改称
昭和 23 年	4 月 茂木中学校早坂分校設置。
昭和 43 年	早坂小学校廃校、愛宕小学校創設。
昭和 44 年	早坂中学校廃校、小島中学校へ

## 52 甕岩（こしきいわ）



年代未詳 長崎市歴史文化博物館所蔵 絵葉書写真



正面木立が甕岩



正面木立に巨岩がある。



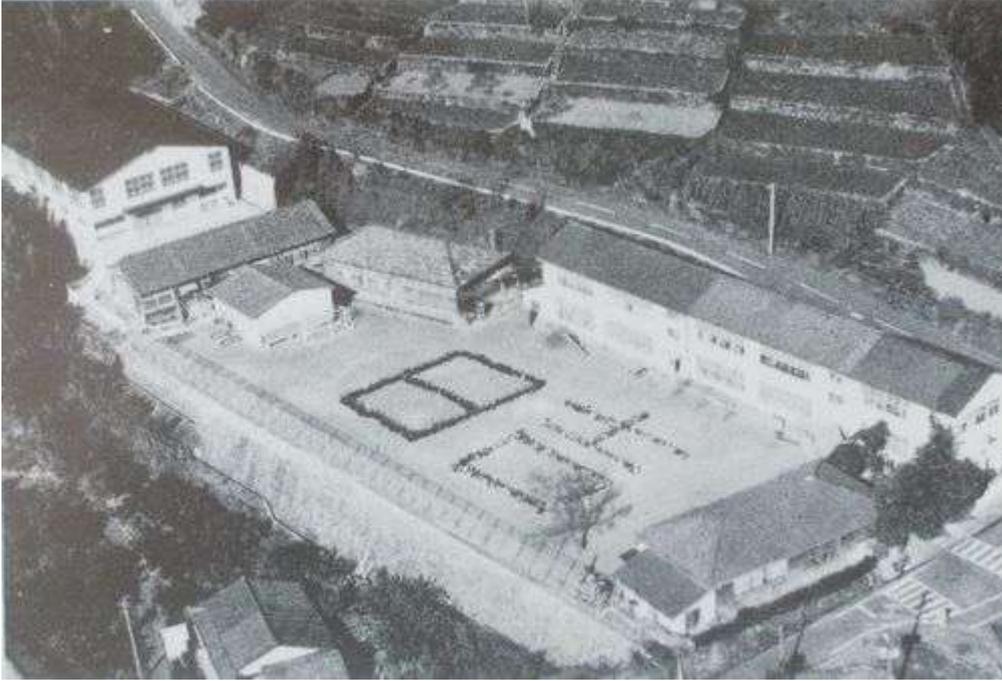
巨岩の周りや途中に木が生えている



左の写真の巨石の反対側にある甕岩神社

甕岩は、上の写真の中央上部の木立部分に巨石があり、写真に写っている反対側に甕岩神社が祀られている。下の写真でも中央の木立部分に位置している。甕岩神社からは島原・天草方面が望まれる。現在は一帯が公園として整備されている。

## 53 日吉小中学校



年代未詳 木造校舎



年代未詳

明治 14 年	民家を借りて小学校創設
明治 24 年	現在地に校舎を新築し、太田尾小学校と称す
明治 41 年	日吉尋常小学校と改称
昭和 2 年	高等科を併置し、日吉尋常高等小学校と改称
昭和 16 年	日吉国民学校と改称
昭和 22 年	日吉小学校と改称 茂木中学校日吉分校を併置
昭和 25 年	日吉中学校として独立
昭和 37 年	1 月 1 日長崎市編入により長崎市立日吉中学校、同小学校となる

## 54 大宮小学校



昭和 24 年頃



昭和 25 年

大宮小学校が廃校と決まり、大崎地区は南小学校へ、宮摺地区は茂木小学校に移る時の記念写真。



宮摺町と大崎町の間であり。県道から山手に上がったところに位置する。

現在は、畑になっていて、ハウスが建てられている。上の写真の右側の枇杷の木の間にハウスの上部が見える。

明治 14 年	6 月 大崎・宮摺両名に茂木小学校分教場を設置
明治 19 年	4 月 簡易大崎小学校、簡易宮摺小学校と改称
明治 32 年	両校合併して、大宮尋常小学校と改称
昭和 27 年	3 月 31 日 廃校

## 55 南小中学校



年代未詳

昭和 22 年 4 月 1 日 藤田尾名を為石村に編入したことから、昭和 23 年に千藤（千々名、藤田尾名）・大宮（大崎名、宮摺名）の統合問題が起こり、昭和 27 年 4 月 1 日千々名、大崎名を校区とする茂木町立南小中学校設立。



校舎の 1 階が小学校で 2 階が中学校となっていた。



## 56 千々



年代未詳  
千々の船着場

千々の浜は砂浜で船をつける設備が無いため、船着場では写真のように板を架けて乗船、下船をしていた。

潮が引いて船が着けられない時は、左側の岩場に着けていた。写真の左手前の建物は、千々の枇杷集荷場で、この裏側から弥生式土器の遺跡が見つかっている。



海岸にコンクリート造りの船着場の跡が残っている。



年代未詳 千々からの花嫁を乗せた船



年代未詳 千々海岸の千力丸

茂木本郷（現：茂木町）から千々、大崎間の道路は、昭和36年から5年間かかって林道が整備された。大崎までバスが通うようになったのは昭和39年11月、千々は昭和43年11月であった。

道路ができる前の人や物資の輸送手段は船であった。当時町内交通の船は、5.6トンの発動機船で「千力丸」・「ちどり丸」・「かもめ丸」の3艘が運航していた。茂木港から千々までは40分かかっていた。

左の写真の船は、3艘のうちの千力丸で、後方の山は猿岳山である。

## 57 ちとう 千藤小学校



昭和 27 年 3 月

千藤小学校は、千々町と藤田尾町を結ぶ県道の千藤トンネルの近くにあった。藤田尾名は昭和 22 年に茂木町から為石村に分離している。



跡地は、畑になり、千藤尋常小学校跡の標識がある。右端は千藤トンネル。

明治 15 年	茂木小学校分校として創設
明治 19 年	簡易千々小学校、簡易藤田尾小学校と改称
明治 25 年	千々尋常小学校、藤田尾尋常小学校と改称
明治 27 年	両校合併して、千藤尋常小学校開校
明治 33 年	写真の場所に校舎を新築移転（従前は、千々名木場の民家を借りていた。）
昭和 22 年	4 月 茂木中学校千々分校開設
昭和 27 年	3 月 31 日 大宮小学校と統合のため廃校